

森鷗外『青年』の主人公小泉純一のモデルについて

ゝ 大宮公園が『青年』の舞台に選ばれた背景などゝ

沼田尚道

森鷗外『青年』第十二章で大村莊之助が主人公小泉純一との遠足の目的地に大宮公園を選んだ背景に迫るため、小泉純一のモデルとして夏目漱石門下生の森田草平が意識されていたことについて論考する。

森田草平は、明治の文豪夏目漱石に絶大なる影響を与え、日本文学の大きな転換のきっかけを作った人物と言っても過言ではない。しかしながら、昭和の大戦以降はほとんど読まれることはなくなり、その名を知る人も大変少なくなった。このため、森田草平を語るには「夏目漱石門下生の」という枕詞を冠さねばならない。もともと、森田草平は自らを「(夏目漱石の)永遠の弟子」と称しているのだから草平自身がそのことを望んでいたのかもしれない。

第一部 森鷗外『青年』と明治期の大宮公園を概観する

森鷗外の長編小説『青年』の『スバル』連載は、明治四十三年三月号に始まり、同四十四年八月号まで続いた。このうち、明治四十三年十月一日発行の第二年第十号に掲載された第十二章の舞台は大宮公園である。

一 『青年』のあらすじ

故郷から汽車で上京した主人公の青年小泉純一は新橋駅に降り立つ。東京の本郷界隈で生活を開始するが、その閱歴には疑問を抱いている。そうした中、年長の医学生大村莊之助と知り合う。有楽座でのイブセン公演で謎の目を持つ坂井れい子未亡人と出会い、その邸宅を訪ね仏文学の本を借りたりする。坂井夫人邸を訪問した翌日、純一は大村に誘われて晩秋の大宮公園を訪れる。大宮公園内を散策しながら展開される二人の会話はワイ

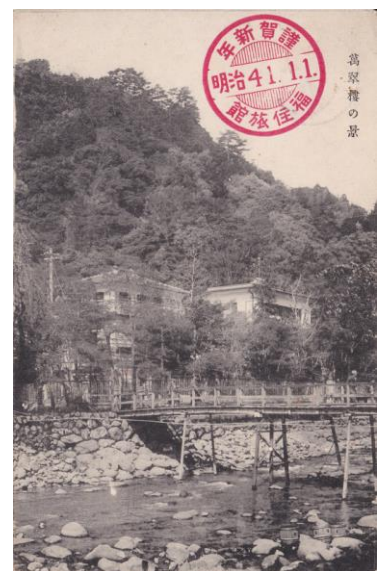


写真1 絵葉書「萬翠樓の景」
(筆者所蔵)

『青年』第24章に描かれた箱根の旅館・福住萬翠楼である。

「明治 41.1.1 謹賀新年 福住旅館」の丸く赤いスタンプが押されている。

ニンゲルの説を中心とした女性観と恋愛論。そして、公園内の散策を終えて池の畔に來た二人の話題は文筆家としての活動についてである。その後、主人公純一は亀清楼での忘年会で柳橋芸者の立ち居振舞いに触れる。クライマックスは坂井夫人に誘われて訪れた箱根の旅館福住の場面。坂井夫人与親密にしている画家岡村の姿に衝撃を受けた純一は坂井夫人との決別と文筆家として立つことを決意する。純一が宿泊した柏屋の女中お絹は東京へと帰る純一をしょんぼりと見送った。

二 『青年』第十二章に描かれた大宮公園散策の足跡

『青年』の第十二章は十二月一日。小泉純一は大村莊之助の提案によって、上野の停車場から汽車の一等の席に乗って二人で大宮公園に出掛けた。

純一の呈した疑問に大村が答えながら大宮公園内を散策する。二人の話題は女性観と恋愛論。ここで引き合いに出されたのがオーストリアの若き哲学者ワイニンゲルの説。公園散策中、どこからか三味線の音と共にとよめく男女の声が聞こえている。大宮公園散策の足跡を図1に示す。

三 大宮公園散策の前段 外国文学作品が多数紹介されるゝ

大村莊之助と共に大宮公園に出掛けるまでに主人公小泉純一はどのような経験をしていたのか？ 第九章から第十一章までを概括する。

第九章は十一月二十七日。純一は有楽座でイブセンの『ジョン・ガブリ

エル・ボルクマン』を観劇する。この演劇は、明治四十二年十一月二十七と二十八日の両日、実際に公演された。森鷗外は二日目に劇場に足を運んだ（なぜ初日ではなかったのか?）。脚本は森鷗外がイブセンの原書を翻訳したもので、若者が古い因襲を振り捨てていく筋だ。第三幕後の少し長い幕間で、純一は隣席の凄じいような美人から《フランス語をなさるのなら、宅に書物が澤山ございますから、見に入らつしやいまし》と誘われる。

第十章は十一月三十日。《生きる。生活する》と思いを巡らす純一は《現在とは過去と未来との間に画した一線である。此線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである》と考えるのだった。この日、坂井夫人の目の奥の秘密を知るために根岸の邸宅を訪ねた。鷗外は、坂井夫人の謎の目にベルギーの耆宿ルモンニエエが描いた魅惑の未亡人オオドの目を重ねて見せた。純一が訪れた坂井夫人邸の書棚にはコルネイユ、ラシイヌ、フルテエル、ユウゴオが並ぶ。この章末で《一体こんな閑歴が生活であらうか。：。己もデカダンスの沼に生えた、根のない浮草で、花は咲いても、夢のような蒼白い花に過ぎないのであらうか》と日記を書いて筆を置いた純一だったが、その夜はなかなか眠れない。

第十一章はその翌十二月一日。朝起きた純一は、坂井夫人から借りて来たラシイヌ『フェエドル』は読む気になれず、二三日前に神田で買ったユイスマンス『彼方』を読み始める。この作品中、バルザック、フロオベル、ゴンクウル、ゾラが掲げられている。ユイスマンスはフランス自然主義文学の代表格ゾラの弟子だ。十一時半頃訪ねて来た大村はどこかに遠足に行こうと提案する。二人は上野精養軒で昼食をとる。話題は因襲と恋愛。自然主義文学者ユイスマンスの著作も話題となるが、大村はこの悪魔的で神秘的な外国作品を青年の読むような本ではないと切り捨てて否定している。

四 大宮公園を訪れた文人たちのことなど

明治十七年開園の大宮公園内に明治二十一年に温泉を掘り当てた料亭旅館・萬松楼が開業した。明治二十四年秋、病氣療養と大学の試験勉強を兼ねて大宮公園の萬松楼に滞在した正岡子規は夏目漱石を誘い出し共に愉快



写真2 絵葉書
「中仙道大宮氷川公園萬松楼 縁門」(筆者所蔵)



写真3 絵葉書
「中仙道大宮氷川公園萬松楼 鉾泉浴場」
(筆者所蔵)

明治21年春、主人高島健一郎の父が温泉を掘り当てて萬松楼を開業した。夏目漱石や正岡子規もこの湯に入ったのだろうか。

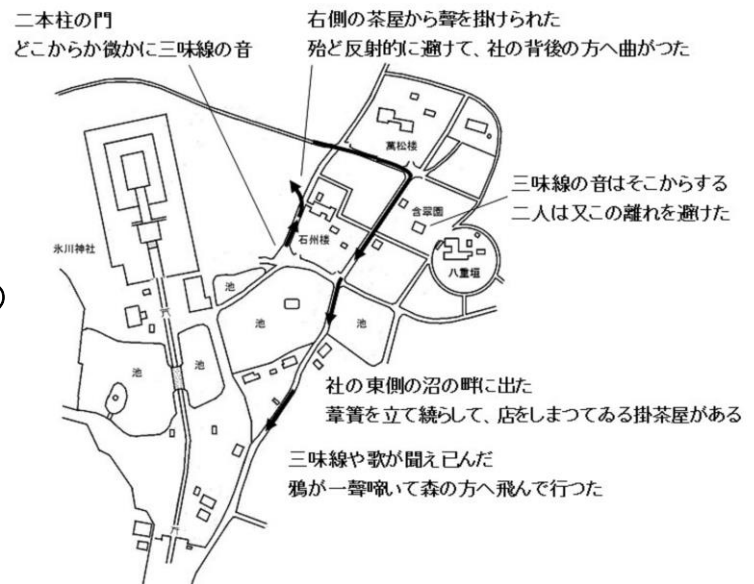


図1 『青年』第12章 大宮公園散策の足跡（筆者作図）

な時間を過ごしている。萬松楼の主人は文学好きであったと伝えられる。

樋口一葉は、明治二十五年八月にその生涯で一度だけ東京を離れて遠出しているが、その目的地が記者たちがしきりに薦めた大宮公園であった。

明治三十八年、当時流行の自然主義作家正宗白鳥との縁談のあった女性「いの」が最終的に選んだ伴侶は、大宮公園後背地に在った寿能城の家の末裔北沢楽天だった。秋山喜久夫は『いのには新聞記者小柳某を通して、正宗白鳥との縁談もあった。が、いのは楽天の方を選んだ』と伝えている。

北沢楽天は福沢諭吉に見出され諷刺漫画を描き、後に『東京パック』を創刊した日本初の職業漫画家である。古い新聞記者からの伝聞として『楽天さんはね、二人曳きの人力車をもちいていたんだぜ』『楽天さんは、大臣宰相とキミ、オレのつきあいをしていたんだよ』と近藤日出造（岡本一平の弟子。昭和四十八年当時、日本漫画家協会理事長）が書き残している。北沢楽天はそれほどの漫画家だった。大宮の歴史家宮内正勝さんは楽天から『楽天全集』に為書きをもらった経験談をととても嬉しそうに話してくれた。

大正十年十月十五日、寺田寅彦は大宮公園を訪れた。少し前にM君と大宮公園の話をしたことを思い出していることだ。寺田寅彦は随筆『写生紀行』に『名高いこの公園を一見しないのも、あまりに世間というものに申訳がないと思って大きな鳥居をくぐってはいって行つた。』と記している。寺田寅彦がM君と呼ぶ人物は、同門の森田草平と捉えて間違いない。

太宰治の『人間失格』が書きあげられたのは大宮公園から南へ約二キロにわたって延びる氷川参道から少し入った静かな家の一室であった（残念ながら現存しない）。

ほかにも多くの作家たちが大宮公園を訪れ、また、作品に書き残した。

第二部 森鷗外『青年』の主人公小泉純一のモデルは？

森鷗外『青年』の主人公小泉純一のモデルについては諸説あるが、筆者は夏目漱石門下の森田草平が純一のモデルになっていると考える。第二部では森田草平について多角的に分析することとする。

一 仮説 小泉純一のモデルは、夏目漱石の永遠の弟子森田草平

小泉純一のモデルを唯一ひとりの実在人物に確定することは本稿の目指すところではない。むしろ、モデルを一人に確定しようとしても、その試みは虚しいものに終わるだろう。森鷗外の作品では複数の実在のモデルから一人の登場人物が形成されていることが多いらしい。然るに『青年』の主人公小泉純一も複数の実在の人物がモデルとされている可能性が高い。小泉純一のモデルが誰かについては森鷗外研究者の間にも定説はないようだ。野田宇太郎は石川啄木であると主張しているし『青春の季節』昭和二十八年十一月五日発行）、澁川驍は柏木純一であるという論を立てている（『青年』の小泉純一）、森鷗外記念会『鷗外』昭和四十二年七月号）。これらの説はそれなりの背景に基づく主張であり尊重すべきものである。部分的には石川啄木であり、柏木純一であることを否定する理由はない。本稿はこれらの説にもう一つ有力な説として夏目漱石門下の森田草平を追加しようとするものである。

二 森田草平とはどんな人物か

森田草平は、平成の今日では完全に忘れ去られた小説家である。が、夏目漱石の創作活動に大きな影響を与えた門下生の一人である。漱石は草平を教室では学生だが文筆活動においては対等以上の才能の持ち主と見ていた。一方、森田草平は自らを「（夏目漱石の）永遠の弟子」と称した。

森田草平の代表作である『煤煙』には、夏目漱石、森鷗外、小宮豊隆が序文を与えている。この小説の価値の高さがうかがえる。

昭和二年十一月十五日発行の『明治大正文学全集 第廿九卷』に掲載の森田草平『自叙小傳』によれば、明治三十二年七月に金沢の第四高等学校一部文科に入学。同年十一月にはある故を以て同校を諭旨退学させられ、その後、明治三十三年五月まで名古屋に放浪。その間森鷗外の『水沫集』を耽読した。また、漱石入門後においても『水沫集』の真似ばかりして、あの香りの高い文章の調子と修辭とかを再現することにのみ熱中してゐた』と草平は『続夏目漱石』（昭和十八年十一月十日発行）に記している。

森田草平の就職活動に関して興味深い記録がある。『日本評論』昭和二十四年十二月号に掲載された草平晩年の随筆『往時茫々』に、一高に通った頃のこととして『澁沢栄一家に家庭教師に入った。：私が出入りしている時分には六十一の本卦帰りのお祝いがあり、それからまもなく子爵になった。：当時栄一さんの先妻の子はもう立派な大人になっていた。：栄一さんの後妻に堅子夫人というのがあって、その後妻の子が四人いた。それを教えた。：月給は二十円だった。』とある。これが縁となって、大学を卒業した草平は『澁澤榮一男の自筆の紹介状を持つて、博文館主大橋新太郎氏の許へ就職運動に行ったことがある。：立派な應接間へ通されたが、間もなく主人新太郎氏自ら出て来て、懇功に用向きを聴取した上』で縷々条件が出された。結局、草平はこの就職を断念している（『続夏目漱石』）。

森鷗外は夏目漱石の門下生森田草平をどのように見ていたか。明治四十三年七月一日発行の『新潮』に掲載された『夏目漱石論』から引用する。鷗外は夏目漱石門下生について記者に問われて次のように答えた。

『門下生と云ふやうな人物で僕の知つて居るのは、森田草平君一人である。師弟の間は情誼が極めて深厚であると思ふ。』

明治四十二年十一月六日、鷗外は、観潮楼歌会で上位に入った森田草平の短歌「水中に溺るる如き」に対して自ら筆を取つて修正指導した。また、この日、鷗外は草平に『煤煙』の序として執筆した『影と形』の稿本を渡している。その二十日ほどの後の十一月二十七日、草平は『ボルクマン』の初日公演を観劇して、その劇評を十二月一日の朝日新聞に掲載している。しかしながら、草平が自ら進んで観劇に行くとも思えない。鷗外が一日目のチケットを草平に譲つて観劇を勧め、自らは二日目に出掛けることにしたのではないだろうか。

片岡良一が『国語と国文学』昭和十二年一月号の紙面上に発表した論文『森田草平氏の位置と作風』は興味深い言葉で書き始められている。鋭く森田草平の内面を切り取っていると思うので引用する。

『森田草平氏は云ふ迄もなく夏目漱石門下である。にも拘らずその作風には、漱石系統といふより、寧ろ森鷗外系統の類廃派に近いものを持つてゐる。と云つて類廃派になりきつてゐるのでもない』

夏目漱石が森田草平に宛てた書簡に注目したい。その文面から漱石が草平の文学的才能を早くも認めていたことが分かる。注目すべき箇所を引用する。一つめは明治三十九年一月七日付、二つめは同年二月十五日付である。草平が漱石の門を叩いたのは明治三十八年の暮れ近くであるから、これらの書簡は草平の入門から間もなくのものだ。この頃、漱石は『吾輩は猫である』を『ホトトギス』に連載中。多忙を極めていたはずだ。

『僕は君の文が出る度に讀みます。さうして時間の許す限り、心づく限りは愚評を加える積りです。其代り惡口を云つても怒つてはいけません。大学では君の先生かも知れないが個人として文章杯をかく時は同輩である。決して僕に對して氣を置いてはならぬ。君はあまりに神經的、心配的、人の心を豫想しすぎる様な傾向がありはせんかと思ふ。他人に對してはとにかく僕に對してはさうせん方がいゝ。君も氣楽でいゝでせう。』

『僕の様なものに到底文學者の例にはならないが僕は君位の年輩のときには今君がかく三分一のものもかけなかつた。其思想は頗る淺薄なもので且つ狹隘極まるものであつた。僕が二十三四にかきかけた小説が十五六枚残つて居た。よんで見ると馬鹿氣てまづいものだ。あまり耻かしいから先達て妻に命じて反古にして仕舞つた。』

自然主義文學者正宗白鳥は、『夏目漱石論』で草平を次のように評した。『森田草平氏の『煤煙』が朝日新聞に連載されて、評判になつていた時分のことである。ある日、私は、博文館の応接室で、田山花袋、岩野泡鳴兩氏と雑談に耽つてゐるうち、談たまたま『煤煙』の価値に及んで、誰れかが非難の語を挿んでいたが、

「しかし、漱石の比じゃない」と、泡鳴は例の大きな声で放言した。「それはそうだね」と、花袋は軽く応じた。

私は、黙っていたが、心中この二氏の批評に同感していた。「漱石の比じゃない」という評語を、今日の読者が読んだら、「草平の作品は漱石には及びもつかない」という意味に解するかも知れないが、あの頃なら、その評語は、「煤煙は、評判ほどのものではないにしても、漱石物のような詰まらないものではない」という意味に受け入れられるのであった。」

平塚らいてうは、一九七一年発行の『元始、女性は太陽であった』に、閨秀文学会で講義する森田草平の様子を次のように記した。閨秀文学会とは明治四十年六月に成美女子英語学校にできた若い女性ばかりの文学研究会で、生田長江の主導で運営され、与謝野晶子も講師を務めた。

『講義慣れない様子で、机の両端をいつもつかむようにしてうつむきながら、あまりわるそうに、まるでひとりごとでもいうように、ポツリポツリと話される格好が印象的でした。生田先生がいかに人なれて、万事に鋭く、そつない感じなのにくらべ、森田先生は大きな頭、大きなからだで動作が鈍く、隙だらけの感じですが、それがかえって、愛嬌になっているともいえるのでしょうか。』

後に東北大学教授となる小宮豊隆は、明治四十二年七月一日発行の『ホトトギス』に掲載の『ダヌンチオの「死の勝利」』と森田草平の「煤煙」において、『煤煙』を『故郷の巻は何の爲めに存在して、後段のどの部分に因果關係を持つてゐるかと考へて見るに、何んにも關係してゐない。關係ない許りではない。丸で反対な色彩を有してゐる。』と評した。また、『草平のやうな、自分で現實に體驗した事の一部始終を、現實どほり書いて行くのでなければ、小説は書けないといふ作家は、それほど数多く小説が書けるものではない』(『夏目漱石』(昭和十三年七月一日発行)と記している。

森田草平が自ら起こした事件と自らの過去の記憶とを題材に創作されたのが『煤煙』である。小宮豊隆の言うように、『煤煙』の前半部分に描かれた要吉の故郷での出来事と後半部分の塩原行との關係性は極めて薄い。また、長編小説も短編小説も世に知られたものは数少ない。岐阜の森田草平

記念館館長の森崎憲司さんはそれらを遺すべく冊子にまとめる作業に取り組んでいる。筆者は森崎憲司さんから直接お話を伺うことができた。

三 森田草平の小説『煤煙』について

『煤煙』は、『三四郎』の朝日新聞連載が明治四十一年十二月二十九日に終了した後釜として明治四十二年一月一日から五月十六日まで連載された。

『煤煙』の前半は、要吉の祖父が切り倒した道三松の話と要吉の父親からの遺伝についての疑念に起因する要吉の憤悶が描かれている。後半で、要吉はこうした因襲や自らの優柔不断な意気地のなさから決別するすべを朋子に求めた。それが相対死のための塩原の雪山行きへと発展する。塩原へ向け上野発の汽車に乗った要吉と朋子は、途中、大宮の宿で一夜を語り明かす。要吉は朋子の心の中を確認しようとするが、二人の考え方は火と氷ほども異なっていた。そして、この小説は雪山に分け入るところで終わる。

『煤煙』の要吉と朋子が塩原の雪山に分け入る場面は、実際に森田草平が平塚明子(後の平塚らいてう)と起した事件を基に描かれた。この相対死の企ては結果として未遂に終わり、捜索に行った生田長江に東京に連れ戻された。この事件は、夏目漱石門下生の学士と政府高官の令嬢が起したが故に、世間の注目を集めた。朝日新聞はこの事件を大々的に取り上げた。明治四十一年三月二十五日には『自然主義の高潮 紳士淑女の情死未遂／情夫は文學士、小説家／情婦は女子大學卒業生』、三月二十六日には『戀の犠牲(いけにえ) 嗚呼新時代の青年／男も學者女も學者／學問の行止が情死』とセンセーショナルな見出しが付けられた。

塩原の雪山から東京に連れ戻された草平は、生田長江の助力により夏目漱石の庇護を受けることとなり、この事件を題材に作品を書くことを決意。そして、その作品が『煤煙』と題され朝日新聞連載小説として世に出た。

夏目漱石は、主人公要吉(すなわち森田草平)の故郷の場面と因襲に係る煩悶を描いた前半の完成度を高く評価した。しかしながら、要吉と朋子の關係を描いた後半には批判的であった。

前出の片岡良一は、その論文『森田草平氏の位置と作風』で、『煤煙』の

価値について『明治の文學に、前人未踏の新しい境地を、附加へた作品』と評価した。その一方で、『題材に對する明徹な把握とそのよき具象化とがあつたら、『煤煙』は恐らくもつと印象的な、深い感銘をたゞへた作品となり得た。』大雑把な粗笨さがあつたため、折角の作が、甚だ混雑した、混沌たる趣を示したものとなつて、明治文學史上の傑作の數を、一つだけ減らすことになつて了つた』と指摘している。『煤煙』の終盤においては、遅筆な草平は新聞連載小説の締め切りに追われ、しまいには新聞社の輪転機の側でその日の原稿を書くという綱渡りの創作・執筆であつたのだから、片岡良一の『大雑把な粗笨さ』との指摘はごもつともなことなのである。

四 尾崎紅葉『金色夜叉』の舞台の一つは塩原温泉

前述の事件はダヌンチオ『死の勝利』を下敷きにして草平が起したとされるが、その場所を塩原とした背景に係る文学研究は見当たらない。

尾崎紅葉の『金色夜叉』と言えば、熱海で寛一がお宮を足蹴にする場面が有名であるが、複数の続編があつてストーリーも複雑に入り組んでいるために酷評する文学評論が少なくない。ここで敢えて『金色夜叉』について言及するのは塩原温泉が舞台となつていいるからだ。『続続金色夜叉』では塩原温泉清琴楼を訪れた寛一が高利貸しによる身請けを背景とした心中を試みようとする男女と遭遇する。清琴楼には寛一のほかにはこの一組しか宿泊客はない。粉剤を混ぜた酒を茶碗に注ぎ合い、合掌して南無阿弥陀仏を唱えている二人の前に貫一が登場する。借金から意に添わぬ身請けとなろうとする新橋柏屋の愛子と紙問屋支配人狭山元輔が貫一に説得されて思い留まるという筋である。身請けの客富山唯継は博文館大橋新太郎がモデルと言われている。この大橋新太郎に対して森田草平が就職活動した経験を持つことは既に述べた。さて、ここで心中を止めに入つた貫一を森田草平と平塚明子の搜索のために塩原温泉まで出向いた生田長江という配役と捉えてみると、森田草平らの事件は『続続金色夜叉』の筋と大変似ている。それゆえ、『金色夜叉』の『煤煙』への影響を強く感じるのである。

「金色夜叉」とは金色の夜叉ではなく、金に憑かれた夜叉であるところ



写真4 絵葉書「紅葉山人金色夜叉起草 紀念旅館清琴楼全景」(筆者所蔵)

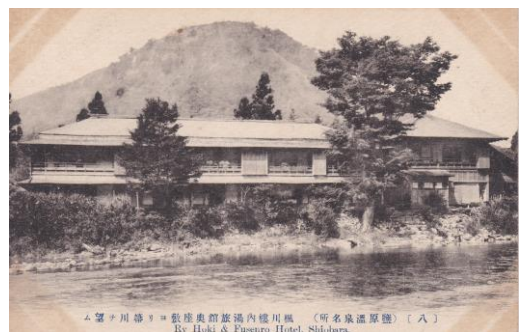


写真5 絵葉書「塩原温泉名所 楓川楼内 湯旅館奥座敷ヨリ箒川ヲ望ム」(筆者所蔵)

M43.9.26 朝日新聞の記事:
宿の者から「煤煙」の話を聞いた。…明子は七十銭以上の石鹼を買ってくれと注文した。

の金夜叉と、色に憑かれた夜叉であるところの色夜叉を描き出そうとしたものだ。金と色の問題は江戸期から明治期の文学作品に多く扱われていた。故に、『金色夜叉』の筋は明治の青年たちにとっては古いものなのだ。

他方、『煤煙』は、金夜叉でもなく色夜叉でもなく、故郷の古い因襲を断ち切りたい男が自立心の高い女との間に恋愛以上のものを求めて霊と霊の結合を探索するという、新しい夜叉を描き出そうとする展開だ。新しい人が新しい境地を目指した作品だった。この背景には、欧州から急激に取り入れられることとなった自然主義文学の受容があるのは言うまでもない。

第三部 『青年』に紹介される外国文学作品と、森田草平の『煤煙』

第三部では、『青年』と森田草平の小説『煤煙』の類似点や関係性などを提示しつつ、森田草平と森鷗外の関係を読み解くことを通じて、森田草平が『青年』の主人公小泉純一のモデルとなつていいるとする論拠を提示する。

一 『青年』に多くの外国文学作品が紹介されているのはなぜか？

塩原から東京に連れ戻された森田草平は、一か月と十日間、夏目漱石宅

に世話になり、小説『煤煙』を書くことに専念する。しかしながら、女主人公朋子を描くことがなかなかできなかった。朋子を構成するためのモデルを外国小説に探したがなかなか見つからなかったのだ。『続夏目漱石』昭和十八年十一月十日発行）に示された森田草平の言葉を引用する。

《今迄讀んだ西洋の作をいろ／＼繰返して讀んで見た。その中にはダンヌンチョの『死の勝利』もあり、ドストエーフスキの『罪と罰』もあつた。……ズーデルマンの『猫橋』も借りて來て讀んだが、『肝腎の朋子については、何うしてもさういふお手本が見附からなかつた。イブセンにあるだらうと思つて繰返して讀んで見たが、いづれも型が違つてゐた。』

『煤煙』の女主人公朋子のモデルとされた平塚明子は、森田草平に「自分は中性であり女ではない」と言つていた。そんな女主人公について考えるうちに、森田草平は平塚明子の性格を「二重人格」ではないかと疑う。と同時に、この女性を「悪魔的」とも捉えていた。『続夏目漱石』からの引用を続ける。

《私は女主人公朋子を病人にするにあらざれば、近代的な比類のない性格——惡魔主義の權化のやうな女性にしたいと思つてゐた。『三四郎』の美禰子も裡に小惡魔を蔵してゐる。それを一層極端にして、燃ゆるやうな情熱を盛る一方に於ては、極めて冷酷な、相手を犠牲にして憚らない、いはゞ何處か病的な所のある女性に描き上げて見たかつた。さうする事が彼女を解釋する唯一の道だと信じてゐたからである。』

森鷗外が『青年』に多くの外国作品を登場させているのは、鷗外のディレッタンティズムの現れなどではない。『青年』で医学生である先輩格の大村莊之助が主人公小泉純一に様々な外国小説や外国の哲学を提示して語り聞かせているのは、外国作品に女主人公のモデルを探そうとしたがなかなか見つからないという苦悩の中から絞り出された森田草平からの問い掛けに対する、森鷗外からの回答であり示唆なのである。取り分けワイニンゲルを取り上げたのは、「個人は皆M+W」の視点や「娼妓の型」「母の型」の女性の捉え方を草平に提示するために間違いない。他方、ユイスマンス

は激烈で青年の読むようなものではないとして、大宮公園に向かう以前に惡魔主義的な作品は否定された。女主人公を惡魔主義の權化のように描こうとしていた森田草平への警告であろう。

夏目漱石も、森田草平のこの考え方には否定的だ。草平から『煤煙』の朋子像を聞き取った漱石は《あゝ云ふのを自ら識らざる偽善者と云ふのだ。……つまり自ら識らずして別の人になるといふ意味だね。で、朋子も自ら識らずして別の人になつて行動してゐるんだとすれば、それで解釋が出來ないこともない》と指摘した上で、《何うだ、君が書かなければ、ボクがさう云ふ女を書いて見せようか》と言ひ、草平は《どうぞ書いて御覽なさい》と応じた。そうして出來上がった女性像が『三四郎』の美禰子である。

二 『青い鳥』 ～平凡な日常の背後に潜んでいる象徴的意義を体験する～

森鷗外『青年』単行本の扉のページには青い鳥の画が掲げられている。『青年』はマアテルリンクの『青い鳥』が基調を成している旨の暗示だ。

第二十章で、純一は、訪ねて來た大村に《内生活に立ち入るやうな未來も丸で示してないことはないのです。併し僕にはそれが、唯雜然と並べてあるやうで、それを結び附ける鎖が見附からないのです。矛盾が矛盾の儘であるのです》と『青い鳥』の読後の意見をするのだが、これに対し、大村は《矛盾が矛盾の儘であるやうな所は、その脚本の弱點だらうね》と応じる。その一方で、哲学者は《人間を外から覗いてゐる》《内界が等閑にせられる》《平凡な日常の生活の背後に潜んでゐる象徴的意義を體驗する、小景を大觀するといふ處が無い》と哲学者の人間の見方に対して強烈な批判を浴びせている。そうしておいて、《さう云ふ處のある人は……マアテルリンクしかあるまい。》として、《君が雜然と並べてあると云ふ、あの未來の國の子供の分擔してゐる爲事が、悉く解けて流れて、青い鳥の象徴の中に這入つてしまふやうに書きたかつたには違ひない》と続けた。

この言葉に秘められた主張は大変重要である。なぜならば、これは『青年』初版本の扉に描かれた青い鳥についての森鷗外の主張であるからだ。そう言えば、『青年』も『青い鳥』と同様に、様々なことがらが雜然と並

べてあるように見える。それは、何気ない日常の小事象を一つの溶鉱炉に叩き込んで鎔かしてかき混ぜた上で時間を掛けて冷まして行けば然るべき形に固まって象徴的意義を示してくれる、という森鷗外の主張なのだろう。『青年』を読む際には、そのような姿勢で臨みたい。

更に、第二十章では、鷗外は大村の口を借りて『青い鳥』について、『青い鳥の幸福といふ奴は煎じ詰めて見れば、内に安心立命を得て、外に十分の勢力を施すといふより外有るまいね』と主張した。今日的には子供のための寓話と位置付けられている『青い鳥』であるが、鷗外はそこに日常に潜む意味を読み解き、『小景を大観する』という視点を提示したので。

ここで改めて『青年』第十二章の章末に注目する。大宮公園内散策後、大村と純一は、掛茶屋のある池の畔にやってくる。公園散策中の話題は女性観と恋愛論であったが、公園内の散策後の池の畔での話題は文筆活動のことへと移る。ここでの大村の話が終わると、純一の心に変化が生じたことを象徴するかのように鴉が森の方へと飛び去った。夕日を浴びて紫色に輝いていた鴉は青い鳥には変わらなかった。『青い鳥』で子どもたちが不思議な国で青い鳥を探し回っても見つからなかったのと同様、探し物を探してみたが見つからなかったということだ。二人が散策中に話題にしたワインゲルの説に基づく女性観と恋愛論やニーチェの言うディオニソス的なものは鴉となって森の方に飛び去った。

第十二章に描かれた大宮公園は、主人公小泉純一に対し、その上京の目標である文筆活動に方向性を提示し、その創作に原点回帰の契機を与える場所となっているのだ。大宮公園はそうした重要な場所として選ばれた。

ところで、『青年』第一章では、純一は千駄木の鷗村の居宅の駒寄のところからちらりと覗き込んだ。この何気ない仕草の描写に込められた鷗外のメッセージは、第十二章における哲学者が人間を外側からしか見ていないという主張につながる伏線だ。これは外面だけでなく内生活まで描いてこそ文学作品として価値のあるものになるという鷗外から文学を志す青年に対する示唆である。同時に、修辭ばかりに熱中して内面を疎かにしてはならないという警告でもある。

三 『青い鳥』と『鴉』と『沈黙の搭』

『青年』と同時期に成立した二つの作品『鴉』『沈黙の搭』がある。『青年』が扱った青い鳥とこれらの作品に現れる鴉とを対比して考えざるを得ない。森鷗外の『鴉』は、翻訳の短編小説である。『鴉』の冒頭では年老いた鴉が半ば水に浸かりそうになりながら流れに浮かんでいる木片に止まっているのだが、通りかかった仕事にあぶれた男たちが木片を蹴り、鴉はくるくると回りながら川の流れに流されて行ってしまうという場面がある。職にあぶれた男たちは寒々しい風景の中を歩いて行くのだが、仕事にありつける見込みなどない。その中の一人の老人が一行と行き会った青年の言葉に希望の光を感じる。しかし、次の瞬間にはその青年は老人に金の無心をする。他の男たちは皆逃げてしまった。この老人は僅かな金額の金しか持つておらず、自らも他人に金の無心をするような立場である。それにも関わらず、この老人は青年に有り金すべてを差し出した。そして、鴉がしていたように川沿いに整然と並んだ並木である白楊の木に背中を寄せて坐り込んだ。余談であるが、『白楊』は森田草平の雅号の一つでもある。

*** **

森鷗外は『沈黙の搭』を『ツアラトウストラかく語りき』の序文として生田長江に与えた。沈黙の搭とは、ゾロアスター教の死者の弔いの場・墓地である。搭といっても丸く高い壁があるだけで屋根で覆われていない。運び込まれた遺体は猛禽類がつかみ一日にして白骨になるという。

森鷗外の『沈黙の搭』は、大逆事件に直面した日本自然主義文学に向けて書かれたと言われる。『沈黙の搭』には搭の高みにとまる猛禽類に代えて鴉が登場し、搭の上で鴉の宴会がさかんだった。では、なぜ『ツアラトウストラかく語りき』の序文が『沈黙の搭』なのか？ゾロアスター教を開いた人の名の独逸語読みがツアラトウストラなのである。森鷗外が生田長江に序文として与えられた背景が少し見えた。

生田長江は、明治四十二年五月に『ツアラトウストラ』の翻訳に取り掛かり、以降一年半その翻訳に没頭した。自らの年譜に、明治四十三年冬には『森鷗外先生の御宅へ度々推参して、『ツアラトウストラ』の難解な箇處

を教へて頂く」と記している。また、漱石にも同翻訳の相談に行っている。

生田長江は、森田草平を関西文学会の講師としての参加を勧め、草平はそこで平塚らいてうと出会うこととなった。草平が相対死未遂事件を起こした際には塩原まで捜索に出向いた。平塚らいてう率いる一派の活動に「青鞥」という名を提案した人物でもある。面倒見の良い人物である。

『煤煙』に登場する要吉の友人神戸のモデルは生田長江である。『青年』に登場する純一の友人瀬戸は誰であろうか？ 筆者は『青年』の瀬戸も『煤煙』の神戸と同様、生田長江であろうと推察する。『青年』における瀬戸の性格に加えて「瀬戸」というネーミングが、瀬戸内海に面した港町神戸に在る生田神社を想起させ、そして、生田長江を想像させるのである。

四 森田草平の短歌「水中に溺るる如き」

《水中に溺るる如き手附きして 頭のあらぬ偶像をだく》

この短歌は、森田草平が森鷗外から『煤煙』の序『影と形』の稿本を受け取った明治四十二年十一月六日に開かれた観潮楼歌会で最高点の一つとなっている。この短歌の作者を知った森鷗外は「そいつは——」と言って筆を取り下の句の一部手直しをした。そうして完成した短歌である。同歌会に参加していた与謝野鉄幹はこの短歌を再誦三誦したという。草平はこの短歌をエピソードとして『煤煙』の巻頭に掲げた。

岐阜市に在る森田草平記念館には類似の書が保管されている。その書とは《人生は水中を泳ぐが如し 浮いてゐると信じてゐる間は浮いてゐられる もう駄目だと思った途端にぶく／＼と沈むものである》というものだ。また、晩年の随筆『往時茫々』（昭和二十四年十二月）には、十五歳で故郷を離れ上京し攻玉社という海軍に入るための学校に入學した頃の心持を《非常なロマンチックな考え方から、水雷にでもあつてぶかぶか死んでしまふのが一番いいという氣持であつた》とも記している。

自分の生活は《根のない浮草》のようだという『青年』の主人公純一の発想は、こうした森田草平の水中に浮かぶか沈むかという考えに大変近い。森田草平が水中に溺れる如き手附きをしている一方で、『青年』第六章に

は、純一が、《大村といふ人は何をしてゐる人だか知らない。……なんだか

力になつて貰はれさうな氣がする。ニイチエといふ人は、「己は流の岸の欄干だ」と云つたさうだが、どうも此大村が自分の手で掴へることの出来る欄干ではあるまいかと思はれてならない》と考える場面が描かれている。

欄干は、流れに流され溺れていく者にとつて、そこに留まるための手助けをしてくれる者の象徴ということだ。森鷗外『鴉』に描かれた鴉がつかまりどころを無くして川の流れに流されていく様子と対比して捉えてみたい。このニイチエの言葉というのは『ツアラトウストラ』の中の一節だ。生田長江はこれを《我は流に沿える欄干なり。我を捕うることを得んものは捕えよ》と訳出している。鷗外から教示を受けた箇所の一つかもしれない。

氷川神社の池に掛る赤い欄干の神橋は、『青年』が書かれた明治四十年代には既に現在の位置にあつた。その当時は氷川神社の境内と大宮公園の敷地には、今のような明確な区別はなかった。大宮公園散策の際に通ることとなるこの赤い欄干が森鷗外にニイチエの言う流れに沿った救いの欄干を想起させ、欄干が水中に溺れようとする青年を救うという着想に結びつい

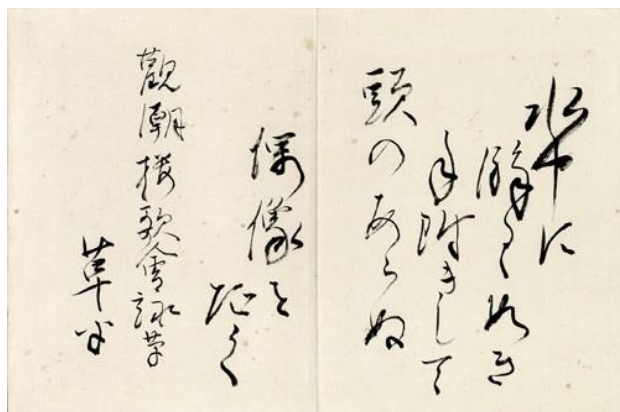


写真6 森田草平の直筆書（筆者所蔵）
「水中に溺るる如き手附きして
頭のあらぬ偶像をだく
観潮楼歌会詠草 草平」

た可能性は大いにある。この欄干の掛かる池は現在では孤立した池となっているが、大宮公園造成以前には氷川神社境内に在る水源から発して見沼田んぼへと連なる水田を潤す豊潤の源を成す流れであった。(写真9)

五 直筆書に添えられていた三つの断片が語りかける

玉英堂という古書店で「水中に溺るる如き」の森田草平直筆書を見つけた。元は寄書帖の一面で大きさは24.2×36.2センチ。「玉英堂なら真贋性に間違いはない」との大学図書館司書からの示唆もあったので、この一品物は逃してしまおうと二度とお目に掛かれない貴重な史料と考え、手に入れることにした(写真6)。届いてきた品物には法政大学の用箋に書かれた直筆断片三片が添えられていた。これら三片は本稿における論考を裏付けすることとなる大変貴重な史料となった。森田草平は大正九年に法政大学の教授になっていたので、使用された用箋や筆跡から、これら三片は同時期に(大正十年に)書かれた森田草平の筆によるものと推察される。これら三つの断片はM君が寺田寅彦と大宮公園の話をした際に筆を取って書いて見せたものかもしれぬ、などと筆者は思いを馳せている。

*** ** *

直筆書に添えられていた一つ目は、「水中に溺るる如き」の短歌が詠まれた観潮楼が森鷗外宅である旨を書き示した断片である。

二つ目は陶淵明の『帰去来辞』の一節であり、「雲無心以出岫 鳥倦飛而知還」。読み下すと「雲は心無くして以て岫を出で、鳥は飛ぶに倦きて還るを知る」である。これは、『青年』の大宮公園の場面の最後で池から飛び立ち山の方へと飛び去った鴉の姿を彷彿させる。いろいろなことを試みたが本来の方向(お祖母さんの話した伝説)に回歸するとの意とも取れる。

そして、三つ目は「能楽黒塚(安達原)」についての書き付けであり、「大正十年夏」とある。大正十年は寺田寅彦がM君(すなわち森田草平)との話を思い出して大宮公園に出掛けた年である。また、現在大宮区宮町に所在する曹洞宗大宮山東光寺には「黒塚」伝説がある。東光寺が大宮公園至近の土地から現在の地に移転したのは寛文年間(1661-1672)のことである。

六 箱根での決意 ―お祖母さんが話してくれた伝説への回歸―

『青年』第二十四章、大晦日の箱根福住で、坂井夫人が画家岡村と親密にしているところに触れ、純一から坂井夫人に向けられた視線は『美しい肉の塊が横はつてゐる』と変化した。同時に『今何か書いてみたら、書けるやうになつてゐるかも知れない』と感じている。それは純一の目指す作風の変化となつて現れる。『純一が書かうとしてゐる物は、現今の流行とは少し方角を異にしてゐる。なぜと云ふに、そのcolorは國の亡くなつたお祖母あさんが話して聞かせた伝説』である。坂井夫人に会うために箱根に向けて東京を出る少し前には『所謂自然派小説の影響を受けてゐる最中であつた』が、『こん度は現代語で、現代人の微細な觀察を書いて、そして古い傳説の味を傷けないやうにして見せよう』との方向転換がなされたのだ。

この純一の主題選択は、『煤煙』の著者森田草平の実体験と酷似している。『青年』の小泉純一の場合と『煤煙』の要吉(すなわち森田草平)の場合とを比較してみてもらいたい。『煤煙』は草平の実体験に基づく創作だ。

*** ** *

森田草平は、自著『夏目漱石』(昭和十七年九月二十日発行)に、夏目漱石への入門前には、『自然主義の文學に接して、所謂自然主義の洗禮を受けてゐた』と記している。また、『煤煙』の前半には、要吉(すなわち森田草平)が、幼少の頃にお祖母さんから何とも言えぬ陰鬱で暗い感じが漂う伝説を聞く場面が描き出されている。その伝説とは次の通りである。

要吉の祖母は、要吉の祖父が切り倒した古い木のために、毎月要吉を連れてお詣りをする。道三松と呼ばれた地元では祟りがあるとして誰も近づかなかつた松を、皆が止めるのも聞かずに、要吉の祖父は切り倒してしまつた。切り倒したときにその古木は血しぶきをあげた。若く血氣盛んだつた祖父は卒倒してそのまま帰らぬ人となつた。要吉の祖母はその時以来お詣りを欠かさない。しかしながら、この古木の祟りか、要吉の父は手足が不自由となる病に寝込み、そのまま亡くなつた。

要吉の祖母である『老婆は歸りの道すがら孫に向つて聞かせた』この様にして毎月お前を連れて来て、道三の墓へお詣りしてお詫びをするのも、

皆お前の祖父様が餘り氣が荒かつたためばかりぢや。あの時私がいくら留めたか知れんのに聞き入れなさらんで、昔から崇りがあると云ふ道三松を到頭伐つてお仕舞ひなされた。それから自家は道三に崇られたのぢや。」

七 『青年』と『煤煙』に描かれた「お絹さん」をめぐる

坂井夫人との決別を決めた純一は、翌朝、一泊したのみの柏屋を発つことを部屋に來た女中に伝える。その女中は別の女中に言及して《お絹さんがきつとびつくりするわ》と応じた。ここでその女中の名がお絹と分かった。この直前、純一は前夜部屋に來た女中について、《あの女はどこか柔かみのある氣に入つた女だ》と考えていた。『青年』最終章から引用する。

《純一が立つて出ると、女中が革包を持つて跡から來た。：皆純一に暇乞をした。お絹は背後の方にしよんぼり立つてゐて、一人遅れて辭儀をした。》

この『青年』の女中お絹との別れの場面は、『煤煙』前半の最終局面と酷似している。両者を比較してみてもraitたい。『青年』は明治四十三年三月一日から翌年八月一日まで『スバル』に連載された作品である。一方、『煤煙』は明治四十二年一月一日から五月十六日にかけて朝日新聞に連載された作品である。

*** **

母お絹と叔父様との間の金の問題に一定の決着をつけた要吉は、お絹に《明日の朝東京へ歸らうと思ひます》と伝え、お絹は《何うして、急にそんな事を言ひ出すのだえ》と泣き出しそうな顔になった。翌朝、故郷を後にする要吉が停車場に着いた際の描写を『煤煙』から引用する。

《不圖、今朝立ちがけに門迄送つて出て悄然（しよんぼり）立つてゐたお絹の顔が泛んだ。明日立つと言ひ出してからは、お絹は唯おろおろして、荷拵へを手傳ふ間も始終涙含んで計りゐた。》

*** **

『煤煙』において、要吉（すなわち森田草平）の母お絹と關係を持つ叔父様と呼ばれる男は老画家である。要吉は亡くなった父ではなくこの老画家が自分の父親ではないかとの疑念を持っている。要吉はお絹と老画家が土

地を元手に金を工面する相談を受けて争っているところに出くわし、故郷を離れる決意をしている。他方、『青年』の箱根の場面は、純一が自分を誘惑した坂井夫人が画家岡村と懇意にしているところに出くわし、坂井夫人との決別を決意するという筋である。箱根福住での坂井夫人と画家岡村の姿が、『煤煙』の要吉の母お絹と叔父様の關係に重なる。都会の有閑マダムと田舎の素朴な女性という差はあるものの、共に未亡人であり、相手が画家という点が一致する。また、金夜叉と色夜叉の違いこそあれ、夜叉と化した女性の姿に触れた青年がその女性（母であれ、妙齡の誘惑的女性であれ）との決別を決意するという筋において同じである。

『煤煙』の前半における要吉の煩悶は、自分は母の不義の子ではないかという疑念である反面、もし仮に父の子でなら父と同様に朽ち果てていく病の遺伝の恐れに苦しめられるというものだ。お絹は要吉の父の生前から男を自宅に出入りさせ、まだほんの子供だった要吉にはこの男を叔父様と呼ばせた。お絹は売れない老画家である叔父様のために沢山あつた農地山林の大方を段々と売り払つて金を工面してきていたのだった。

『煤煙』に登場する要吉の母お絹は、『青年』で純一が宿泊した箱根の旅館・柏屋の女中お絹と同様に立ち居振る舞いも語り口調も柔らかで、毒婦や奸婦という類いの女ではない。極めて素朴な人である。その人がなぜ叔父様と不義の關係（今日で言う「不倫」）になったのかは明らかにされていない。

第四部 大宮・浦和と森田草平の關係について

『青年』第十二章で小泉純一が大宮公園を訪れることになった背景について考察を加える。そのために、根津神社と大宮公園の關係を明らかにするとともに、森田草平『煤煙』における大宮駅の位置付けなどを整理する。

一 『青年』における千駄木の根津神社と大宮公園の描写の相似性

『青年』の冒頭、東京に到着したばかりの純一が歩き回る千駄木界隈の場面で根津神社が登場する。根津神社は、《坂を降りて左側の鳥居を這入る。

花崗石を敷いてある道を根津神社の方へ行く。……小さい門を左の方へ出ると、溝のやうな池があつて、向うの小高い處には常磐木の間に葉の黄ばんだ木の雜つた木立がある。』と表現されている。

一方、第十二章で登場する氷川神社の裏側の大宮公園は《二人は公園の門を這入った。常磐木の間に、葉の黄ばんだ雜木の交つてゐる茂みを見込む、二本柱の門に、大宮公園と大字で書いた木札の、稍古びたのが掛かつてゐるのである。》と表現されている。この大宮公園の門で、純一は《落葉の散らばつてゐる、幅の廣い道に、人の影も見えない》ところを《なる程大村の散歩に來さうな處だ》と思うのである。『青年』の冒頭から、根津神社と大宮公園との関係性についての伏線が引かれていたのだ。大村が鷗外その人であるとしたならば、觀潮楼から程近い根津神社をよく散策した鷗外は、その風景によく似た大宮公園が気に入ったということだ。

ここで改めて、『青年』冒頭に描かれた根津神社を振り返ってみると、《剥げた木像の据ゑてある隨身門から内を、古風な瑞籬で圍んである。故郷の家で、お祖母様のお部屋に、錦繪の屏風があつた。その繪に、どこの神社であつたか知らぬが、こんな瑞垣があつたと思ふ。》と描写されている。

純一は根津神社の風景を故郷のお祖母さんの思い出に重ねて見ていたのだ。前述のとおり、この風景はまた大宮公園の風景にもつながっていた。これらの風景が純一の心に想起させるお祖母さんの思い出が、純一を故郷における伝説を主題とした創作活動へと向かわせたのだ。

二 『煤煙』における大宮駅と汽車のこと

森田草平は、明治四十年前後しばしば大宮近くの浦和の安宿に来ており、大宮界限になじみがあつた。このことは夏目漱石『坑夫』冒頭部分の東京を後にして北へ北へ向かう青年の道程に現れる描写と重なるところがある。また、大宮駅は東京から塩原温泉方面に向かう際の通過駅である。

《やがて大宮に着く。要吉は女を促して汽車を出た。明日の朝汽車を待つて東北へ向ふ積りである。他に行くべき場所も手段も残されないやうに、此處で降りたのは何のためか分らない。二人は停車場を出て大通りを一町

許り行つたが何處の家も寢鎮つてゐる。唯一軒大戸を開けた家を見附けて、その二階へ上つた。》というのが、『煤煙』の大宮到着の様子である。

*** **

平塚らいてうは《この列車は大宮どまりでした。仕方なく、駅前の古ぼけた旅館の一室で一夜を過ごさねばなりませんでした。……宿屋の寒々とした一室で、ふたりは、翌朝の一番列車を待つて一夜を語り明したのですが、熱いお茶一杯飲むでもなく、それで寒いとも、待ち遠しいとも思いませんでした。》と、その著書『元始、女性は大太陽であつた』に記している。

*** **

当時の汽車時刻表を調べてみた。上野発の最終の下りの汽車は午後一時一五分発。確かに大宮止まりだ。塩原方面に向かう汽車は上野駅を午後九時一〇分に出してしまつていた。『煤煙』では、朋子が約束の時刻に遅れたためこの汽車を逃してしまつたが、仮にこの汽車に乗れたとしても西那須野駅への到着は午前一時四十四分となつてしまうので到着した先で困ってしまうことになる。それゆえ、大宮での一泊は、大宮・浦和の宿に精通した森田草平が用意周到に準備した計画的旅程だつたと考えられる。

上野駅を出るとき、行先の選択を「山か海か」と問うた森田草平の手には既に西那須野行きの切符があつたと平塚らいてうは後日談を記している。西那須野駅は塩原温泉の最寄りの鉄道駅である。相対死を企てて東京を出ることとした時点で、草平の頭の中には塩原温泉の雪山があり、途中、大宮駅前の宿屋に一泊することが既に計画されていたのだろう。

三 馬場孤蝶の『浦和の思い出』

夏目漱石門下に入る以前、明治三十六年の暮れに、森田草平は丸山福山町四番地に一軒の小家を見つけ、ここに引っ越して下宿した。偶然探し当てたこの家は樋口一葉終焉の家であつた。馬場孤蝶からその家が樋口一葉終焉の家であると知らされたのだった。その後、馬場孤蝶はこの森田草平の下宿をしばしば訪ねた。「しばしば」というのも尋常な頻度ではない。三日にあげずである。樋口一葉が先輩後輩の垣根を取り払つたようだ。また、

森田草平の友人も続々遊びに来るようになり、明治三十七年にはこの家を会場にして一葉祭を催すことにもなった。

その馬場孤蝶が『浦和の思ひ出』という短い随筆を遺している。

《私が浦和中學校（當事は埼玉縣立第一尋常中學校と稱したと思ふ）へ雇はれて行つたのは、明治卅年の二月半ば過ぎであつた。…後に貴族院議員になつて亡くなつた千頭清臣といふ人があつて、…私は千頭氏から推薦されて浦和へ行くことになつたのだ。》

森田草平は馬場孤蝶に先輩後輩を超えた親しみを感じていたようであり、ほぼ毎日のように会話する中には浦和の思い出についても聞かされていたことだろう。森田草平が浦和や大宮について知ることになった背景には、馬場孤蝶から聞いた話があつたと考えてよからう。

四 森田草平と浦和の安宿

《君が手紙をよさないか顔を出さないと何だか存在を疑ふ様になる外の人にはそんな心配がない。是は君が氣まぐれに浦和の安宿り杯へ行つて考へ込む病氣がある所爲だらうと思ふ。》

これは明治三十九年十一月六日付の夏目漱石から森田草平宛ての書簡の一部である。これに先立つ十月二十一日に漱石は草平に手紙を二通書いている。それは大変シリアスな内容だつた（**図3**に一部引用掲載）。草平はこの書簡の全集掲載のための提供を随分躊躇した。結局、全集に掲載したのだが、草平には《輕はずみでなかつたかといふやうな悔いは後に残つた》。この夏目漱石からの手紙を読んだ森田草平は机の前で考え込み、そして、この手紙を懷中に抱き締めて《湯にでも行くやうな恰好をして、一人でぶらりと戸外へ出た。日は既に傾いてゐた。私の足は郊外へ向かつてゐた。それも中仙道を北へ…ただ北へ／＼と夜通し歩いて行つた。》

これは森田草平著『続夏目漱石』の一節である。引用を続ける。北へ北へと歩き続けた理由については、《かねて自分が失踪して後を晦ますなら、こうして中仙道を北へ／＼と歩いて行くだらうと思つたことがある。それが無意識に働いて、その通りに歩いてゐたものと見える。》と記している。



写真7 絵葉書「大宮駅前篠崎旅館本店」(筆者所蔵)
平塚らいてうが言う《駅前の古ぼけた旅館》であろう。



写真8 絵葉書「浦和外松並木」(筆者所蔵)
明治の末から大正頃の絵葉書であり、北浦和辺りを撮影したものと推定される。街道の道幅や街道両側の盛り土の様子、街道の中央には荷馬車が確認できる。

草平に無意識に働いたことの背景は容易に想像できる。中山道は東京から浦和、大宮を通り関東平野を縦断した後に碓氷峠を越えて信州に入り木曾へと向かう街道である。森田草平は岐阜出身の人であるから、その心理の深層に中山道は故郷や先祖への道という考えが刻まれていたのだろう。

さて、森田草平は浦和の安宿について次のように書き続けている。

《蕨も過ぎ、浦和の町外れへかゝつた時は、さすがに私もくたびれた。一軒の安宿が未だ起きているらしく、懸行燈に灯がとぼっているのを見附けて、無理に頼んで、その晩は泊めて貰つた。…森閑とした家ではあつたが、裏二階の方で老人らしい男の聲と若い娘らしい話し聲が耳に附いて、何時までも眠れなかつた。》

《明くる朝目を覺ました時には、大分氣持ちが變つてゐた。朝飯を済ますと、すぐに宿を出たが、もう北の方へ向かつて旅をつゞける氣はなかつた。近くの神社の境内へ入つて、もう一度先生の手紙をゆつくりと讀み返した。そして、それを懷中へしまふと、今度は停車場の方角を尋ねて、そちらへ行つた。二度同じ道を歩いて歸る氣はもうなくなつてゐたのである。

で、次の汽車で上野まで引き返し：丸山福山町まで戻つて来た。」

中山道を歩いて東京方面には引き返していないのだから、ここで登場する「停車場」は大宮駅のことであろうと推察される。

*** **

漱石が草平宛ての手紙に記した浦和の安宿と関係があるかどうかは明らかではないが、昭和五年に発行された『全国遊郭案内』には次のような記述がある。興味深いので引用する。

『埼玉県は廃娼県で、貸座敷業は一軒も無い。従つて娼妓も居ない訳だ。けれ共乙種料理店と云ふのがあつて此れに代つて居る。組織や制度も殆んど娼妓と変る所は無い。形式は變つて居ても内容に於ては殆んど同一のものである。：：浦和町中野原新開地は埼玉県浦和町字中野原新開地にあつて鉄道は東北線浦和駅で下車、浦和町の東、鉄道路線の東方（向ふ側）にあつて、乙種料理店の集合である。此の乙種料理店が遊樓兼料理店の形式をなして居り、而も警察の公認を得て家毎に酌婦を置いて居るのである。：：縣廳があり、高等學校が出来てからは急に町が發展し出して來たろだ。花柳界も學校の花柳界だと云はれて居る程學生の客が多い。』

これに先立つ記録を探すと、明治十五年三月五日の読売新聞に『埼玉縣下にてハ貸座敷といふハ熊ヶ谷宿ばかり許可になつて居る：：今度北足立郡浦和宿の何某が發起で：：貸座敷を設けたいと其願書を郡長天野三郎氏へ差出せし』と伝える記事があつた。

森田草平宛の漱石の手紙に現れる浦和の安宿が、時代が下つて大正年間以降には、乙種料理店として拡大して行つたということなのかもしれない。

五 夏目漱石『坑夫』の松原と森鷗外『青年』の樹茶屋

『さつきから松原を通つてゐるんだが、松原と云うものは絵で見たよりもよっぽど長いもんだ。いつまで行つても松ばかり生えていていつこ要領を得ない。』

これは夏目漱石『坑夫』の冒頭に表現された松原の様子である。

『東京を立つたのは昨夕の九時頃で、夜通しむちゃくちゃに北の方へ歩い

て来たら草臥れて眠くなつた。泊る宿もなし金もないから暗間の神樂堂へ上つてちよつと寝た。何でも八幡様らしい。寒くて目が覚めたら、まだ夜は明け離れていなかった。それからべつ平押しにここまでやつて来たやうなものの、こつやたらに松ばかり並んでいては歩く精がない。』と云うことだから、この松原はちよつと寝た神樂殿よりも北方に在ることになる。

この『坑夫』に表現された風景と、前述の森田草平が夏目漱石からの手紙を胸に抱えて歩いて行つた中山道の道中の描写は大変似ている。『坑夫』が朝日新聞に連載開始されたのは明治四十一年一月一日であるのに対して、森田草平が中山道の漂泊の旅に出たのは明治三十九年十月末のことである。『坑夫』の冒頭は漱石が草平の経験談を基に創作したに違いない。そのよ

うな漱石の日記などは残されていないが、筆者にはそう思えてならない。休んだ場所が安宿から神樂殿に変わっているが、いずれにしても『坑夫』の松原は一夜休んだ先にあつたのだから、浦和よりも北方に存在していたことになる。写真8に示した絵葉書に注目して欲しい。街道の両側は松並木である。東京を出て中山道を北へ北へと向かうと二〇キロメートルほどで浦和辺りに着く。夜九時に板橋を發つたとすれば午前二時頃に到達できる丁度時間的に合致する距離である。『坑夫』は、更に、『不斷なら競争もできるが、こつ松ばかりじゃ所詮敵わない。』と続く。明治四十年代には、東京高等師範学校等複数の学校が大宮公園までの中山道を長距離競争コースにしていた。当時の新聞にもそれを伝える記事があるから、漱石が「競争」という言葉を用いたことも理解できる。これが『坑夫』に描かれた松原だろうか？ いや、これは松並木であつて松原ではない。

では、松原は？ 明治十四年に作成された地図には土地利用方法が漢字で記載されており、まだ鉄道が敷設される以前の土地の様子がよく分かる。この地図で松原の存在を確認してみた。すると、氷川神社北方の広大な土地に「松」の文字が散りばめられていた(図2)。これこそ漱石の言う松原に違いない。そこで、それを裏付ける文献を探した。あつた。

西角井正慶が記した『吾が市の観光』と題する文章には次のような記録がある。当時同氏は国学院大学教授、大宮市文化財保護委員を務めていた。

西角井正慶の『吾が市の観光』は、『観光おみや』という小冊子に掲載された。その発行年は定かでないが、昭和三十五年頃の発行と聞く。

《大宮公園の裏山は、宮原の方まで続いていた。盆栽村を通り、今の植竹町のあたりで、昔の原市道を土呂の畑に貫けるまで、ほぼ半里位は、人ツ子ひとり会わない静かな山路気分に使れたものだ。：昭和十年頃だつたらう、子供をつれて女郎花を取りに歩いた時「ここらは何時町になるの」と聞くものだから、「さあ町になんかなるまいよ」と、この森林地帯に愛惜を持つ私は、半ば願うような気持ちで答えた。その辺は今の植竹中学あたりだ。》

このようにかつて大宮公園北側の後背地は広大な松原だった。西角井正慶の言う《裏山》の《森林地帯》が将に『坑夫』に描かれた松原であろう。

夏目漱石にとっては、この松原はかつて正岡子規と遊んだ大宮公園の丘

の上に在った萬松楼(写真2、写真3、写真10)の窓の外に広がっていた風景である。

余談であるが、平成の今日、宮原駅の北方に「松原公園」が在る。これはかつてこの辺り一帯が松原であった名残を伝える地名である。

以上、大宮公園周辺の松原・松並木を見てきた。

夏目漱石『坑夫』で「働かないか」と声を掛けられる掛茶屋も、森鷗外『青年』の大宮公園の場面に描かれた池の畔の掛茶屋も、松原や松林の公園の中に在って、いずれも葎簀(葦簀)を立てめぐらしている。これらの掛茶屋が同じ店であるかどうかは不明だが、そのロケーションが松林の中という設定は相似している。しかもいずれも季節は晩秋から冬にかけてである。また、森田草平の中山道漂泊の旅の季節とも一致している。松原の中の掛茶屋の風景は森鷗外、夏目漱石、森田草平をつなぐ大切な要素なのだ。

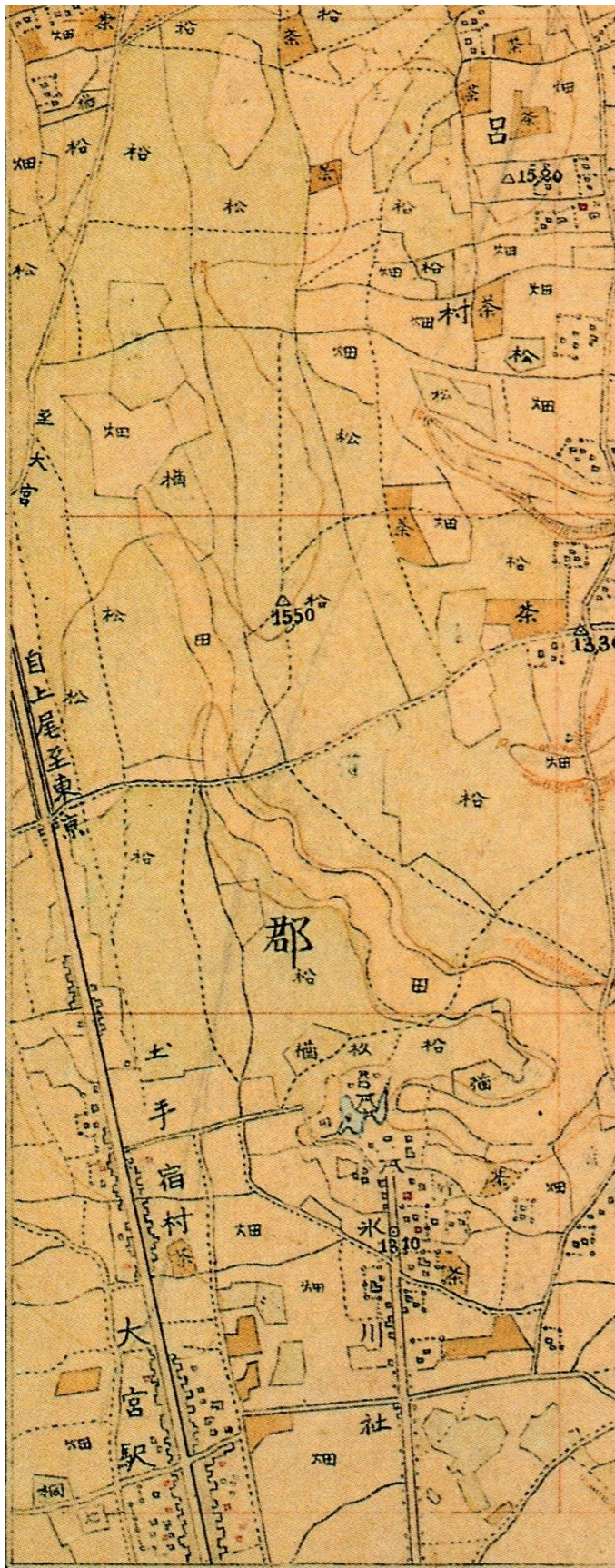


図2 氷川神社北方の松原

【出典】明治14年1月、第一測期第二測回

「埼玉縣下武蔵國北足立郡大和田村及び土呂村」

氷川神社の北方の広大な土地に「松」の文字を見ることができる。この頃、大宮公園はまだない。

【附録】 黒塚伝説と萬松楼 ～『奥細道菅菰抄』を絡めて～

黒塚について、「大宮公園の発展とスポーツの殿堂化」（『大宮の郷土史』第三十三号）に「今は跡形もない黒塚三業地と安達が原の鬼婆がどのような関係を持つか、持たぬかは、大変興味深いところである」と書いた。本附録はそれに対する自問自答の回答である。

大宮公園と日本近代文学について深く追求する中で掘り当てた情報がある。森田草平の直筆書（本文参照）もそうだが、この情報も筆者を大変興奮せしめた。それは萬松楼の木版刷り一枚もの広告である。言うまでもないが、萬松楼は明治二十四年秋に正岡子規に誘われて夏目漱石が訪れた旅館である。表紙に相当する部分は「御料理御宿泊の廣告」の題字と萬松楼のイメージ画で構成されている。その門柱には「温泉場」の看板が掲げられ、門の横には旗竿高く「氷川鉾泉占有」と書かれた旗がはためいている。樹木豊かな庭が広がり、その向こうには二層の建物と渡り廊下、奥には煉瓦造りの高い煙突のようなものが見える。発行年月日はないが、内務省衛生局による鉾泉の試験結果証明として『氷川公園山中第十四區より湧出』《明治廿一年十月》とあるので、明治二十一年十月以降の印刷と分かる。料理と宿泊の料金に続けて、『氷川廣泉専有 埼玉縣北足立郡 大宮町氷川公園 萬松楼 高島』と印刷されている。なお、明治三十二年の埼玉県による公園内土地の「使用者調」で第十四區の使用者が高島健一郎と確認できる。萬松楼の鉾泉は明治二十一年春に高島健一郎の父が掘り当てたものだ。前置きが長くなってしまった。いよいよ本論に入る。

明治二十年代の印刷と推察される「御料理御宿泊の廣告」には名所古跡として「八本松」「潮田山」「九郎塚稻荷」「鬼塚」「蛇松」「三沼の螢」「氷川の銃獵」が紹介されている。これらの中から、他には見られない特徴的な解説文として、「九郎塚稻荷」と「鬼塚」を引用し紹介しておきたい。

《○九郎塚稻荷 黒塚ハ足立藤九郎盛長が出生の地にして代々此地に住みたるよし後ち住居の地に塚を築き稻荷の龕（ほこら）を安置せり是を藤九郎塚と云後年略して九郎塚と云ひ尚ほ明治の改正に誤まつて黒塚と稱する事とハ成れり盛長ハ源頼朝石橋山旗あげの後ち佐々木三郎盛綱の催促により

味方に赴参り鎌倉の頃にハ有名の士なり委しくハ史傳にみへたり》

《○鬼塚 太古ハ武藏野の名あり此土地は足立郡に於て有名の足立が原なり鎌倉の頃の奥州道なり道の傍に塚あり其由所は東光寺阿闍利にして淨佛せし所なり東光坊は紀州奈智山の僧徒にして足立郡八旦那處ろにて此地へ回り來れり時一の庵を建て定錫の地としたるよし今の大宮町東光寺の舊地なり》

ここで二十年ほど時を進める。明治四十二年六月には共同出版から『奥細道菅菰抄』（詳細は後述する）が出版されている。また、森鷗外『青年』が『スバル』に連載されていた明治四十三年十二月に実業新聞社が発行した『大宮案内』は、黒塚について『公園の東南二丁にあり』《奥州安達が原の黒塚は此處なりなど云ひ或は足立九郎盛長の遺跡とも傳へたり》としている。他方、大正三年四月に埼玉時事新聞社が発行した『大宮案内』は、奥州安達原という呼称について、大宮の地が往時鎌倉から奥州に通じる道で奥州街道の足立ヶ原と言うのを省略したとの立場を取りつつ、『足立九郎盛長の塚にして九郎塚と稱すと説く者あれども確證無く』と指摘している。名指しこそしてはいないが、これは前掲の「御料理御宿泊の廣告」の記述への批判とも考えられる。

今度は時を二〇〇年巻き戻す。松尾芭蕉は、『奥の細道』に黒塚に関し『二本松より右にきれて、黒塚の岩屋一見し、福島に宿る』と記している。元禄二年五月一日（1689.6.11）のことである。芭蕉は江戸を出てから草加、春日部を通っており、『奥の細道』では大宮の黒塚に触れることはなかった。

ここで、蓑笠庵梨一の『奥細道菅菰抄』に着目する。これは松尾芭蕉『奥の細道』を解説したもので、安永七年（1798）八月に刊行された。『奥の細道』を解説した書物としては最も権威あるものの一つで、今日においてもしばしば参照される。武州足立郡大宮宿こそが黒塚伝説の地であり、奥州説は誤りとの立場が取られている。その根拠は拾遺集に収録された平兼盛の歌である。兼盛の歌に現れる鬼は女であり、戯れの歌であると旧説にあることから、奥州安達郡の伝説を中国の故事に擬えて情夫との色事の歌と推察している。少々長いが引用する。

《二本松は、駅宿にて、丹羽家の城下なり。黒塚の岩屋は、安達郡あだちが原に有。是も名所なり。拾遺集、みちのくの安達がはらのくろづかに鬼こもれりとときはまことか、平兼盛。旧説に、此鬼は女をさして云たはぶれの詞なりと。按ずるに、中華の俗語に、情夫を冤家と云類にて、皆艶喻なり。○又按ずるに、黒塚のうたひ物にいへる、紀州那智東光坊祐慶の悪鬼を伏せしは、此黒づかにあらず。武州足立郡大宮の宿に有塚の事にて、此処をも、いにしへは、あだちが原と云。是亦足立郡の原なりし故也。今大宮の町に、東光寺と云修験寺あり。即ち東光坊祐慶の開基にて、黒塚は、此寺のうしろの畑中に、今猶存すと云り。安達と足立と、和訓の似たるよりして、うたひものには、奥州の事に混誤したる也。》

余談だが、『奥細道菅菰抄』は、芭蕉の『奥の細道』の冒頭の《月日は百代の過客にして：》を、李白の「春夜宴桃李園序」を下敷きにして書かれたものであり、日月天体の運行を旅に例えていると指摘している。大変興味深い。と言うのも、渋川春海が初の日本製の暦である貞享暦を完成させ幕府天文方となったのが貞享元年(1684)、本所に天文台を設けたのが『奥の細道』開始と同じ元禄二年(1689)だからだ。余談の余談。天正の頃(十六世紀末)まで大宮では大宮暦が制作・頒布されていた、と伝えられている。閑話休題。時代が下って昭和六年十一月。大宮町役場校閲、國民新聞大宮通信部発行の『大宮町要覧』は、『塚の南方に東光坊の遺跡と稱する處があるが今は雑木林となつて居る』《最近黒塚山を切り開いて出来た所謂黒塚三業指定地は：・近く開業の運びとなり》と記録している。どうやら昭和六年以前には大宮公園東側の土地に黒塚山(この「山」は「林」の意味か?)が存在したが、三業地開発のために消滅したということのようだ。

最近では、平成十八年三月に発行された「さいたま市博物館研究紀要 第5集」に掲載の下村克彦「武州大宮宿の黒塚伝説について」がある。『新編武蔵風土記稿』『諸国里人談』『江戸名所図會』等黒塚に関する文献を取りまとめているので参考になる。黒塚伝説の帰属をめぐる武州足立郡と奥州安達郡との間の争いについては、昭和の戦前に西角井正慶が黒塚伝説の地の論争から手を引くことによって福島安達郡にこれを譲って両所間の論争

に決着を付けたことを、秋山喜久夫「黒塚物語―東光寺―」の項で取り上げている。本稿の第四部第五章で触れたように、西角井正慶は地元大宮公園周辺に深い愛情を掛ける人である。同氏が黒塚伝説につき前述のような対応をしたのは、この伝説が大宮公園周辺の観光や住宅地化に悪い影響を及ぼさぬよう、慮つてのことなのだろう。

その意をくめば、ここで敢えて黒塚伝説の話題をほじくり返す必要はない。それにも関わらず、こうして黒塚について言及するのは、森鷗外『青年』にまつわる明治末年頃の大宮公園事情をまとめるに当たってどうしても黒塚のことに触れておかざるをえないと認識したからにほかならない。それと言うのも、子規と漱石が萬松楼を訪れた頃にも、鷗外が『青年』を発表した頃にも大宮公園脇に黒塚伝説があったし、森田草平が黒塚について書き残した直筆書が私のところに転がり込んできたという偶然もあった。鬼婆の伝説のある黒塚山を切り開いて三業地としたということには「よくもまあ」という印象を受けるところであるが、養笠庵梨一が奥州安達郡の説につき《此鬼は女をさして云たはぶれの詞》としたことも含みおけば、黒塚伝説の裏側に男女の戯れごとの着想が潜んでいるとも思われる。森鷗外は、『青年』の大宮公園の場面に三味線の音と共にとよめく男女の戯れを描き込んだ。大宮公園周辺に明治二十年までの根津神社周辺に似た雰囲気を感じ取っていたのかもしれない。森田草平は、その『自叙小傳』によれば、明治三十三年六月に上京した際、根津権現社鳥居前の下宿(一説には、この下宿は根津神社境内地に在った神社所有の離れであるとも伝えられる)に住んだ。そこで河井醉茗と知り合う。河井醉茗は《子供たちよ。これは譲り葉の木です》と始まる詩「ゆづり葉」が有名である。偶然であろうが、草平の小説のテーマ「因襲」「輪廻」を感じさせる。根津神社は氷川神社と同様スサノオを祀る。明治二十年内務省地理局の地図には須賀神社と、明治四十二年以降の地図には根津神社と表示されている。周囲の町名は須賀町、八重垣町である。観潮楼から至近の場所にある根津神社は、鷗外が『青年』の舞台に選んだ大宮公園と風景の相似性を有するのみならず、文学・芸術の世界において重層的に大宮公園と関係しているようだ。

【あとがき】

《歴史とは歴史家と事実との間の不断の過程であり、現在と過去との間の尽きることを知らぬ対話なのであります。》

これはE・H・カーの『歴史とは何か』からの引用である。E・H・カーは歴史的研究の経験に基づき一九六一年一月から三月にケンブリッジ大学で連続講演を行った。それが取りまとめられて出版されたのが『歴史とは何か』という書物である。同書の訳者清水幾太郎ははしがきの中で《過去は、過去のゆえに問題となるのではなく、私たちが生きる現在にとっての意味のゆえに問題になるものであり、他方、現在というものの意味は、孤立した現在においてでなく、過去との関係を通じて明らかになるものである。したがって時々刻々、現在が未来に食い込むにつれて、過去はその姿を新しくし、その意味を変じて行く。》と語っている。これはベルグソンが『物質と記憶』で展開した論を彷彿させる。『物質と記憶』は村上春樹の『海辺のカフカ』でもストーリー展開の重要な鍵として登場している。

今回取り組んだ『青年』の中で鷗外は主人公小泉純一の口を借りて、《現在が過去と未来との間に劃した一線である。此線の上に生活がなくては、生活はどこにもないのである。》と語っている。過去の因襲を振りほどき前進することを求められた明治の時代が強く感じられる。

私は森鷗外の『青年』を通じ、「事実に基づく過去との対話」を楽しんで来た。現在が時々刻々と過去に加えられていくことによって歴史は詳細化し、ときには書き換えられる。古い中にも新しい発見がある。そんな中から未来に向けた有益な視座が得られる。だから歴史を研究したくなるのだ。

本稿の作業を進めて行くに伴って、国内外の文学作品や関連史料は幅と奥行きにおいて限りなく広がりを持ち始めた。これらは私の興味・関心を大きく揺さぶった。歴史の中に散在する情報を、幅広くかき集めて並べて眺めてみると共に、現地に赴き実地で確認することこそ、郷土史研究の醍醐味である。その際、森鷗外が『青年』の中でマアテルリンクの『青い鳥』に向けた視線に習いたいと考えた。何でもない日常の中に大いなる示唆が含まれているのだ。本稿はそうした視座に基づき、小景を大観すべく、取

り組んだものである。

石川啄木は、『埋もれたる歴史』！ なんと面白い題目ではないか。所謂隠れたる歴史ではなくて、この世に現れるべき筈であつたものが、偶然といふ論理の結果で、遂に暗から暗に葬り了られた歴史である。：自分はこの一事を思ひついただけでも、或る重大なる教訓をえた心地がした。機会あらば、自分は、いつか『埋もれたる歴史』の著述に手をつけたいと思ふ。無論これは、一種の小説と称されるであらう。何故ならば、当然の理由に基づいた一の想像を書くのであるから」と日記に記した。

堺屋太一は、著書『世界を創った男 チンギス・ハン』を著すに際し、チンギス・ハンについての主要な原史料は三種四点と大変少ない中、歴史小説の厳密な条件として《史的事実については誤りなく採り入れる（嘘や間違いはない）が、不明な部分は周辺状況やあとの事態などとの整合性を持つ範囲で推測想定する》を守る方針で臨んだ。

私は日本近代文学を専門とする文学研究者でも職業的歴史家でもない。一人の郷土史研究者として、歴史的事実を一つ一つ実地確認するフィールドワークを基盤とする郷土史研究的手法を規範として取り組み、可能な限り資料・史料の原典を参照することとした。また、対象が小説であるという性格に鑑みて、様々な捉え方のできるところについては、文学専門家の論文等を参照するとともに、出来る限り客観的であるよう心掛けた。日本国内外の関連の小説は勿論のこと、手繰り寄せ可能な新聞記事なども参照して、分野横断的・時代横断的な視点から考察を進めた。それは、堺屋太一がチンギス・ハンについての著書をまとめた際の姿勢に近い。

森鷗外は『青年』の中で人間を外から眺めているばかりでなく内面まで描き出すことを好しとした。私は『青年』を大宮公園というフィールドに立って分析することにより作品と現実の関連性にまで踏み込んでみた。これにより作品に描かれた青年像の内面にかなり迫れたと思う。本稿の取組みは郷土史研究の手法による文学のリバースエンジニアリングと言えよう。最後に、本稿の掲載のために、紙面を割いて下さった大宮郷土史研究会の『大宮の郷土史』誌に心より感謝申し上げる。

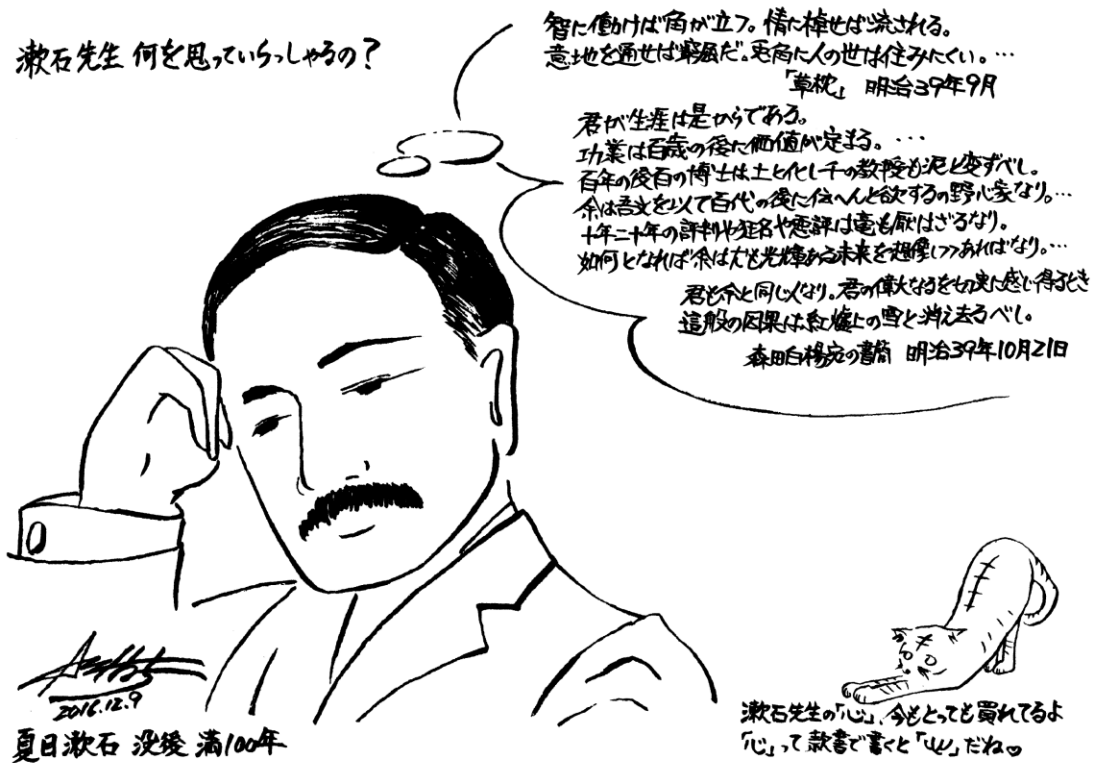


図3 「漱石先生何を思っているの？」（筆者作画）



写真10 絵葉書「萬松樓庭園ヨリ天神山ヲ望ム」（筆者所蔵）



写真9 絵葉書「官幣大社氷川神社神橋遠望」（筆者所蔵）



写真11 絵葉書「北沢楽天画 千年計画」（筆者所蔵）

■写真9は、貼付された一銭五厘の郵便切手に「大正9年11月18日 行幸記念 大宮」の赤く丸いスタンプあり。平成の今日においても氷川神社の池の同じ場所に赤い欄干が掛かっている。

■写真10は、夏目漱石が正岡子規に誘われて訪れた大宮公園萬松樓の庭園から北側の眺望。向こうの丘に松林が広がっているのが分かる。昭和初期まで、この先には広大な松原が広がっていた。

■写真11は、日本最初の職業漫画家北沢楽天が描いた画の絵葉書。写真10と同じ場所からの風景を描いたものと推定する。この画の描かれた当時（大正の頃）、眼下に広がる土地を陸上競技場等スポーツ施設にする計画が本多清六らにより立案されることとなっていた。「一千年生と千年の計を楽しむ人へ計画」と書き添えられている。北沢楽天の心が滲んでいる。

※ 連載100回のうち第1～89回を収録

